

令和2年度
研究集録

川越市教育委員会委嘱学校研究
川越市教育委員会指定学校研究



川越市教育委員会

あ い さ つ

川越市教育委員会教育長

新保 正俊

令和2年度学校研究の成果を、ここに「研究集録」として刊行することになりました。川越市教育委員会委嘱学校研究校及び指定学校研究校が、全職員の協力のもと真摯に研究に取り組まれたことに、心から敬意と謝意を表します。

現在、川越市教育委員会では、第三次教育振興基本計画の策定を進めております。新しい教育振興基本計画は、少子高齢化やグローバル化、技術革新が進展し、「人生100年時代」や「超スマート社会（Society5.0）」を迎えようとしている今日の変化を見据えるとともに、新型コロナウイルス感染症の「新しい生活様式」を踏まえた教育活動、学びの保障を推進するものとなります。児童生徒が、変化の激しい予測困難な社会において、必要な力を身に付け、社会の持続的な発展を支える担い手となるためには、教育が果たす役割はますます重要となっています。

こうした中、各研究校では、自校の実態や課題を的確に把握した上で研究主題を設定し、教員の意識改革や指導方法の工夫、校内の学習環境の整備等、教育活動をより深化・充実させるために実践を重ねてこられました。

それぞれの学校の研究成果は、自分の日々の生活を見つめ心身の健康について考え、体力の向上や健康の増進に取り組む児童生徒の様子、仲間との交流や関わりを深めていく児童生徒の姿、災害発生時に自分の命を守り、安全な学校生活を送るための児童生徒の取組など、子どもたちのよりよい変容となって表れております。特に、委嘱学校研究2年次の2校につきましては、学校の特色を生かした研究の成果を発表され、多くの示唆を与えていただきました。

各学校におかれましては、本集録にまとめられた研究内容や成果を、個々の学校の状況に応じて教育活動をより活性化するための具体的な手立てとして積極的に活用されることを期待しております。そして、一人ひとりの子どもが、夢や志を持って人生を切り拓き、未来社会の創り手となるために、必要な資質・能力を育む教育の充実に向けた取組を一層推進していただきたいと思っております。

結びに、研究に携わってこられた各学校及び地域・保護者の皆様の御尽力と、御指導いただいた関係各位に改めて感謝申し上げます。

目 次

	ページ
【委嘱学校研究】	
〈2年次〉	
川越第一小学校	
「自身の健康に関心を持ち、望ましい生活習慣を身につけた児童の育成」 ～自ら学び、実践する「歯・口の健康づくり」を通して～	1
大東西小学校	
「互いによく聴き、よりよく考え、自分の思いを表現できる児童の育成」 ～特別活動を基盤にした学力向上～	5
〈1年次〉	
霞ヶ関西小学校	
主体的に行動できる児童生徒の育成を目指す安全教育の推進	9
山田小学校	
ひたむきに運動に取り組む山田っ子の育成 ～体育の楽しさを実感できる体育授業～	13
川越第一中学校	
生徒同士の関わりを深める学級活動 ～居心地のよい学級づくり～	17
霞ヶ関西中学校	
主体的に行動できる児童生徒の育成を目指す安全教育の推進	21
【指定学校研究】	
山田小学校	
課題解決的な学習（川越スタンダード）を取り入れた授業改善	25
大東中学校	
主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善	29

研究主題

「自身の健康に関心を持ち、望ましい生活習慣を身につけた児童の育成」
～自ら学び、実践する「歯・口の健康づくり」を通して～

研究のポイント

- 専門家を活用した授業研究
- 児童の実践力の向上をめざした指導の工夫

学校名 川越市立川越第一小学校

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校では、令和元年度（2019年度）、2年度（2020年度）の2年間、日本学校歯科医会、川越市教育委員会及び川越市教育研究会の研究委嘱を受け、「生きる力をはぐくむ 歯・口の健康づくり推進事業」に取り組んできた。歯や口の病気やけがなどについて知り、普段から歯や口の健康に関心や注意を払うことが、歯や口の病気やけがを予防し歯と口の健康を維持することにつながると考えた。さらに、日常生活において、健康的な生活を送るために必要な態度を身につけさせ、その習慣化を図ることが歯と口の健康につながると考えた。そこで、研究主題を「自身の健康に関心を持ち、望ましい生活習慣を身につけた児童の育成」、副題を「自ら学び、実践する「歯・口の健康づくり」を通して」とし、自身の健康に関心を持つことができる児童及び望ましい生活習慣を身につけた児童の育成を図ることを目指した研究に取り組むことにした。

(2) 研究主題設定理由

本校の児童の実態として、永久歯のむし歯処置率は、家庭への積極的な啓発や学校歯科医との連携により8年間100%となっている。しかし、永久歯の一人平均う歯数は、平成26年度まで減少傾向にあったが、ここ数年やや変動していて、0.2を下回っている状況である。この原因として、う歯0の児童がいる一方で、う歯数が多い児童もいるという、歯科保健に対する意識の二極化が関係していると考えられた。以上のことから本校の学校教育目標である「次代を担い、心豊かでたくましく生きる児童の育成」の具現化を目指し、研究主題を「自身の健康に関心を持ち、望ましい生活習慣を身につけた児童の育成」～自ら学び、実践する「歯・口の健康づくり」を通して～とした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

「歯・口の健康づくり推進事業」は、「むし歯や歯周病の予防方法の理解実践」、「学校生活における歯・口のけがの予防と安全な環境づくり」、「食べる機能や食べ方の発達支援を通じての実践的な歯・口の健康づくり」の3つについての研究である。そこで、目指す児童像を「自身の健康に関心を持てる児童」「望ましい生活習慣を身につけた児童」と設定し、「①児童が自ら活動する場を意図的に設定すれば、自身の健康に関心を持てる児童が育つだろう。」「②学校・家庭・地域が一体となって歯・口の健康づくりを推進すれば、望ましい生活習慣を身につけた児童が育つだろう。」という仮説を立て、具体的な手立てを考え、取り組んできた。

3 実践事例

(1) 各学年の授業実践

① 1年生



歯科衛生士とのTTの授業。エプロンシアターを通して第一大臼歯（歯の王様）をどうやって守るのか考えた。



保護者にもご協力いただき、親子で正しい磨き方を実践した。

染め出した歯を観察し、自分の歯に関心をもたせた。親子で正しい歯の磨き方を学ぶことができた。

② 2年生



栄養士さんとのTTの授業。ペープサートやカルシウムの教具を使い、かむことの大切さ、歯の大切さについて考えた。

ペア学習を通して、自分の考えを明確にした。



③ 3年生

自分の永久歯を確認した。



歯の模型を活用し、グループで正しい磨き方を考えた。



正しい歯みがきで自分の歯を磨いた。自分の目標を立てて家庭で実践できるようにした。



④ 4年生

むし歯になりやすいおやつについて知ることができた。



自分の噛む回数とだ液の量の関係を意識するために咀嚼力判定ガムを使った。

自分の目標を立てて「歯っぴーファイル」に記入し、家庭で実践できるようにした。



⑤ 5年生

歯・口のけがはどうすれば防ぐことができるだろうか。



歯・口のけがが起きないための対策を考える。



個人で考えた対策をもとに短冊を使いながら、グループで一つの対策（人の行動と環境それぞれ）を考えられるようにした。

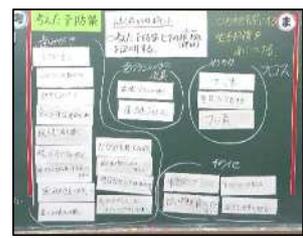


⑥ 6年生



養護教諭や歯科衛生士、プラークの動画を活用し原因を理解する。

デンタルフロスを実際に使用し、歯間のよごれをきれいに落とした。歯周病予防に有効な方法を理解した。



(2) 2年間の実践活動



歯と口の健康づくりアンケートを研究1年次、2年次の2回実施した。「食べ物はよくかんで食べていますか」の質問では、『よくかんでいる』の割合が高くなった。第2学年での食育や第4学年での咀嚼ガムを活用した学習から、かむことへの意識が高まったことが考えられる。「ポケットに手を入れて歩くことがありますか」の質問では、『全くない』の割合が高くなった。第5学年での安全の学習によるものもあるが、教職員も意識が高まり、積極的な声かけができるようになってきているからだと考えられる。



給食後のハッピータイムでは「歯みがきタイム」と週一回の「フッ化物洗口」を行っている。この時間帯には、川越第一小学校で作った「一小歯みがきの歌」が流れている。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 歯科衛生士や栄養士、養護教諭とのTTによる指導で授業を行ったことで役割分担が明確になり、それぞれの専門性が生かされたため、歯・口に対する児童の意欲や意識が高まったこと。
- ② 自校の調査結果や児童のアンケート結果を活用したことにより、児童が自分自身のこととして考えることができたこと。
- ③ 模型や咀嚼ガム、フロスなどの具体物での体験をすることを通して、児童が実感を伴った理解ができたり、客観的に見て考えたりすることができたこと。
→これらのことにより、児童自身の健康に対する意識・関心の高まりが見られた。
- ④ 6年生の歯周病予防の学習では、一人一人が自分に合った予防策を考えることにより、歯・口の健康に対する意識が高まったこと。
- ⑤ 歯科健診でCO、GOがあった児童・保護者に対して、定期的に歯みがき指導や啓発活動を行い、臨時の歯科健診を実施して確認をしていくことで、予防の意識が高まったこと。
→これらのことにより、児童・保護者ともに、望ましい生活習慣への意識の高まりが見られた。

(2) 課題

- ① TTによる指導を充実させるために、歯科衛生士や栄養士との打合せの時間の確保を工夫していく必要があること。
- ② 委員会を中心とする児童の主体的な活動を広げていくこと。
- ③ 児童の学習が家庭でも生かせるように保護者への啓発を工夫し、連携を深めていく必要があること。
- ④ 歯・口の健康づくりの意識をさらに高めていくために、歯科医、歯科衛生士、栄養士などから得られる専門的な知識や情報を、家庭・地域に広げる機会を設け、伝えていく工夫が必要なこと。

これらの成果や課題を、今後の児童の歯・口の健康づくりに生かしていきたいと考えている。

研究主題

互いによく聴き、よりよく考え、自分の思いを表現できる児童の育成
～特別活動を基盤とした学力向上～

川越市立大東西小学校

研究のポイント

- 学級活動（１）が充実すれば児童の聴く力・考える力・表現する力を育むことができる。
- 他教科でも並行して児童が聴く・考える・表現する場面を意図的に設定していけば、児童の聴く力・考える力・表現する力は伸びる。
- 児童の思考や表現を促す環境が整備できれば、児童の聴く態度・考える態度・表現する態度を育むことができる。
- 児童会活動を中心とした特別活動を充実させることができれば、児童が聴く力・考える力・表現する力をより多くの場面で活用することができる。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本研究は下記を目指す児童像として掲げ、研究を進めていく。

- 互いの思いや願いを聴くことができる児童
- 課題をよりよく解決するためによく考えることができる児童
- 自分の考えを進んで表現できる児童

(2) 研究主題設定理由

本校の児童は素直で明るく何事にも一生懸命取り組むことのできる子が多い。一方で2つの大きな課題が見られる。

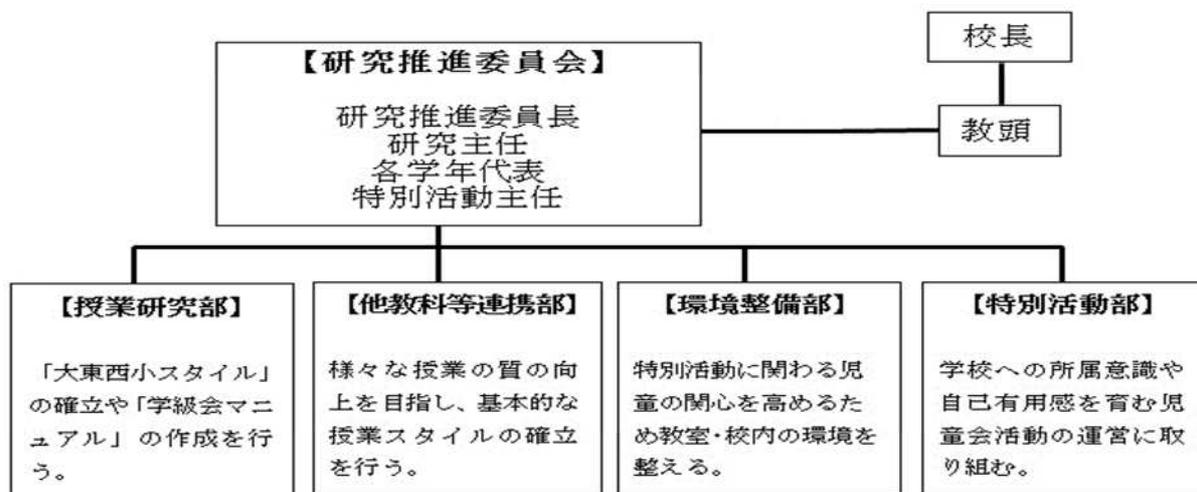
まず1つ目に、各種学力調査における学力が県や市の平均に比べて低いことである。また授業での学習の様子を見ても、課題に対して主体性を持って取り組み、自分の考えを持つことができる児童が少ない。

2つ目が学級内における児童の人間関係の固定化といじめ認知件数の増加などに見られる人間関係の改善の必要性である。本校児童の多くは1小1中の関係である大東西中学校へ進学し、小・中の9年間を共に過ごすこととなる。そして、一度構築された児童の人間関係はそのまま存続することが多い。児童間のトラブルは他者理解の未熟さによるものが大半であるが、大きな変化のない人間関係の中で相互の主張を聴き合う態度の育成に課題が見られる。これらのことから人間関係をよりよいものにする手立てとして、学級会の充実を考えた。

そこで本校では目指す児童像を「互いの思いや願いを聴くことができる児童」「課題をよりよく解決するためによく考えることができる児童」「自分の考えを進んで表現できる児童」の3つに定めた上で、研究主題を『互いによく聴き、よりよく考え、自分の思いを表現できる児童の育成～特別活動を基盤にした学力向上～』と設定した。

(3) 研究組織

研究主題に迫るために以下の研究組織を立ち上げ、全校で組織的に取り組むこととした。



2 研究の内容

(1) 授業研究部

① 「授業の充実を図る8つの視点」を設定

ア 必要感のある議題の選定	オ 反対意見の明示
イ 関連発言の重視と意見の種類	カ 実践までを見通した話合い
ウ 「決まっていること」の明確化	キ 3つの段階に分けた話合い
エ 少数意見の生かし方	ク 振り返り活動までを重視

② 学級会の教具等で統一した

③ 「大東西小スタイル」を確立

④ 学級会の教員用マニュアルとなる「学級会必携」の作成

(2) 他教科等連携部

① 授業の流れを全教科・全学年で統一

② 板書・ノート指導を全校で統一

③ 振り返りの視点を全校で統一

④ 学級会グッズの他教科での活用

だ	だいじなこと 良かったこと
い	今 できるようになったこと
と	友達のを考えてまねしたいところ
う	うまく次に生かしたいこと

大東西小の振り返りの視点

(3) 環境整備部

① 学級会の記録掲示

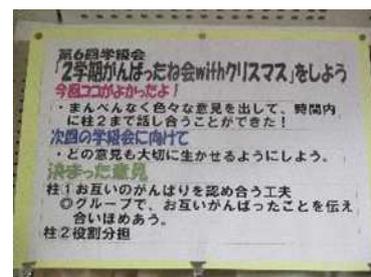
② 「学級会コーナー」の設置

③ 議題の木・議題の実の掲示

④ 常設の児童会コーナー



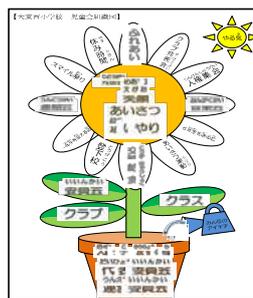
議題の木・議題の実



学級会の記録掲示

(4) 特別活動部

- ①児童会組織の再編成
- ②児童会めあての設定
- ③委員会活動・クラブ活動の活動
- ④各学級での活動記録用紙の作成



再編成した児童会組織をイメージしやすいよう、花のイラストで表現し活動の基本とした。

児童会組織のイラスト化

3 実践事例

5年生 「2年生との仲を深めよう！」

(1) 本時のねらい

- ・2年生に楽しんでもらう活動を通して、高学年としての責任感や、下級生のことを考えながら企画・実行するよさを味わい、よりよい学校生活を創ろうとする態度を育てる。
- ・提案理由を考え、友達の見解と自分の見解を関連させながら話し合いを進め、よりよい合意形成ができるようにする。

(2) 本時では、「授業の充実を図る8つの視点」の中から、ア、イ、キに重点を置いて授業を展開する。

アアンケート調査の結果を示し、クラスの多くの友達が最高学年にむけての不安があることを知り、必要感を共有できるようにする。

イ「〇〇さんが言いたいことは・・・」や「△△さんと同じで・・・」などの型を示しながら、他の児童の発言と関連させることを意識できるようにする。

キ 比べ合う段階では、提案理由と比べてどの意見がより良いものなのか、また意見同士を比べて、今回はよりどちらがふさわしいかの2つの視点で意見を出すことを意識させる。まとめる段階では合意形成が図れるように考えながら話し合いを進められるようにする。

(3) 教師の指導計画

話し合いの順序	指導上の留意点
1 はじめの言葉	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p style="text-align: center;">2年生との仲を深めよう！</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・提案者の思いを全員が理解し、話し合いの指針となるよう、また話し合いの方向性が定まるように事前に指導する。
2 計画委員の自己紹介	
3 議題の確認	
4 提案理由やめあての確認	

5 決まっていることの確認

- ① 12月7日（月）8日（火）9日（水）11日（金）の25分休みに行く。
- ② 2年4組と、ふれあい班ごとに行く。
- ③ 場所は5の3教室、2の4教室、児童会室、校庭。
- ④ 準備の時間は朝活1回と休み時間。
- ⑤ 遊びの内容は掲示の通り。

6 先生の話



- ・提案理由を意識したり、他の人の意見を意識したりして、話合いがまとまるような発言をするように促す。
- ・話合いで出た意見を聞いて、建設的な意見が言えるように促す。
- ・前時までの活動の反省が生かせるよう、掲示を活用して助言する。

7 話合い

〔柱1〕2年生と仲を深めるための工夫

〔柱2〕役割分担

- ・発言者が偏らないよう助言する。
- ・提案理由を意識した意見が発表できるように助言する。
- ・他の人の意見も聞きながら、関連した意見を出し話合いがまとまるように意識できるようにする。
- ・話合いが本筋から逸れたり、自治的活動の範囲を超えそうになったりした場合は助言する。
- ・自分の考えとは違う意見等も、組み合わせたり折り合いを付けたりして納得して考えを変えることも必要であることを助言する。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・学級会を通して、他教科等の授業でも児童一人一人が自分の意見を持って発言する機会が大いに増えた。
- ・「授業の充実を図る8つの視点」を基に授業をすることや「学級会必携」を活用することで学級会について全職員が共通理解の下、指導することができた。
- ・他教科でも振り返りの視点を活用し、学力向上に生かしている。

(2) 課題

- ・コロナ禍で学力に係る諸調査の検証が大幅に遅れ、行動面での変容でしか検証できなかった。
- ・関連発言や心配意見に対する改善策、話合いの進行に関わる意見など、意見の種類を増やせるようにしていく必要がある。次年度以降も引き続き、みんなで話し合い、みんなで解決していく望ましい集団を形成していけるようにする。

「主体的に行動できる生徒の育成を目指す安全教育の推進」

学校名 川越市立霞ヶ関西小学校

研究のポイント

- 児童が自ら考えて判断し行動する場を設定する。
- 小中連携を通して、学年ごとにテーマを決めた防災学習に取り組む。
- 外部の専門家の指導の下、研究を推進する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

学校において、子供たちが安全で安心な環境で学習活動等に励むことができるようにすることは、公教育の実施において不可欠なものであり、学校では、事件、事故、あるいは災害に対して、子供たちの安全の確保が的確になされるようにすることが重要である。しかし、近年、子供たちが犠牲となる様々な事件や事故、自然災害などが校内外において発生し、学校が子供たちの安全を確保するために適切な対応を行うことが求められている。

このような状況の中、昨年度、本校は令和元年度文部科学省委託事業「学校安全総合支援事業」を受けた埼玉県教育委員会・川越市教育委員会の委嘱を受け、霞ヶ関西中学校と連携し、防災教育を中心とした安全教育の指導法の研究に取り組んだ。この研究により、災害時の身の守り方や学校や通学路の危険について学び、災害に対して興味・関心を高めることができた。この研究をさらに深め、定着させることが本校の安全教育の推進に資することになると考え、継続して研究に取り組むこととした。

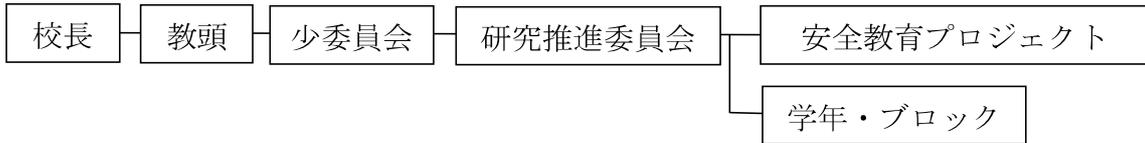
昨年度の取組を引継ぐとともに、各学年の年間指導計画の見直しや他教科や領域との関連を整理し、学年ごとにテーマを決めて学習を行うことで、安全教育の充実を図る。そして、それらの活動を通して、自分の身を自分で守り、安全確保に対して主体的な行動ができる児童を育成することが本研究のねらいである。

(2) 研究主題設定理由

学習指導要領総則には、「各学校においては、児童や学校、地域の実態及び児童の発達の段階を考慮し、豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて時代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、教科等横断的な視点で育成していく」と示されている。

近年では、平成28年の熊本地震や平成30年の北海道胆振東部地震など、死傷者が多く出ている地震が記憶に新しい。昨年度の研究において、災害時の身の守り方や学校内外の危険に対する知識を身につけることはできたが、大きな災害を自分事として捉えることはできていない。大きな災害が発生した時に、児童が自ら考え自ら行動できるように、本研究主題を設定して研究を進めることとした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

- (1) ショート訓練の実施
- (2) 防災意識調査アンケートの実施(1回目)
- (3) 避難訓練の改善
- (4) 学年ごとのテーマ学習の実施
 - 1年生 : 防災ダンスゲーム
 - 2年生 : 教室内で身を守る行動
 - 3年生 : 教室外で身を守る行動
 - 4年生 : 学校外で身を守る行動
 - 5年生 : 川などの災害(理科)
 - 6年生 : AEDの使い方
- (5) 防災意識調査アンケートの実施(2回目)
- (6) アンケート結果の分析と検証

[写真①]避難訓練実施レポート

3 実践事例

(1) ショート訓練の実施

7月上旬、教室や特別教室で緊急地震速報を使って、休み時間や授業時間に地震が起きたことを想定した避難訓練を各クラス実施した。地震学者の慶応義塾大学 准教授大木聖子氏(以下、大木准教授と表記)より、短い期間に何回も行うことが効果的であると指導を受け、週1回×4回のショート訓練を行った。1年生では、1回目に教室で自分の身を守る3つのポーズのうち「さるのポーズ」「だんごむしのポーズ」を練習し、2回目に緊急地震速報を使った練習、3回目に休み時間に地震が起きた想定での練習、4回目に特別教室での練習と段階を踏んだショート訓練を実施した。

(2) 防災意識調査アンケートの実施(1回目)

児童の変容をみるために、児童の防災に対する意識調査を9月に実施した。主な項目は、「防災に関するニュースを気にしているか」、「防災について調べたことがあるか」、「防災について、家庭で話しているか」の3点である。

(3) 避難訓練の工夫改善

従来の避難訓練のあり方を見直し、より良い避難訓練を実施するために以下の2つの取組を行った。

①避難訓練実施レポートの活用

川越市教育委員会で薦めている「避難訓練実施レポート」を活用して避難訓練の計画と振り返りを行った。避難訓練ごとに教員がレポートを作成し、安全教育部会で検討することで、次回の避難訓練の改善に役立てることができた。[写真①]

②様々な仮想トラブル下での避難訓練の実施

9月の避難訓練では、地震後に火災が発生した場合の避難訓練を実施した。ここでは、地震による影響で放送機器が使用できなくなったことを想定し、職員が大きな声で校内を走り回り、避難を促す避難訓練を実施した。避難訓練実施レポートでの振り返りでは、職員が2階→3階→4階と大声で知らせていったが、1階への伝達に時間がかかってしまったことや、外に避難するタイミングがわからなかったなどの意見があがっていたので、次の避難訓練で改善していきたい。[写真②]



[写真②]避難訓練の様子

(4) 6年間を見通した発達段階に応じた学年ごとのテーマ学習

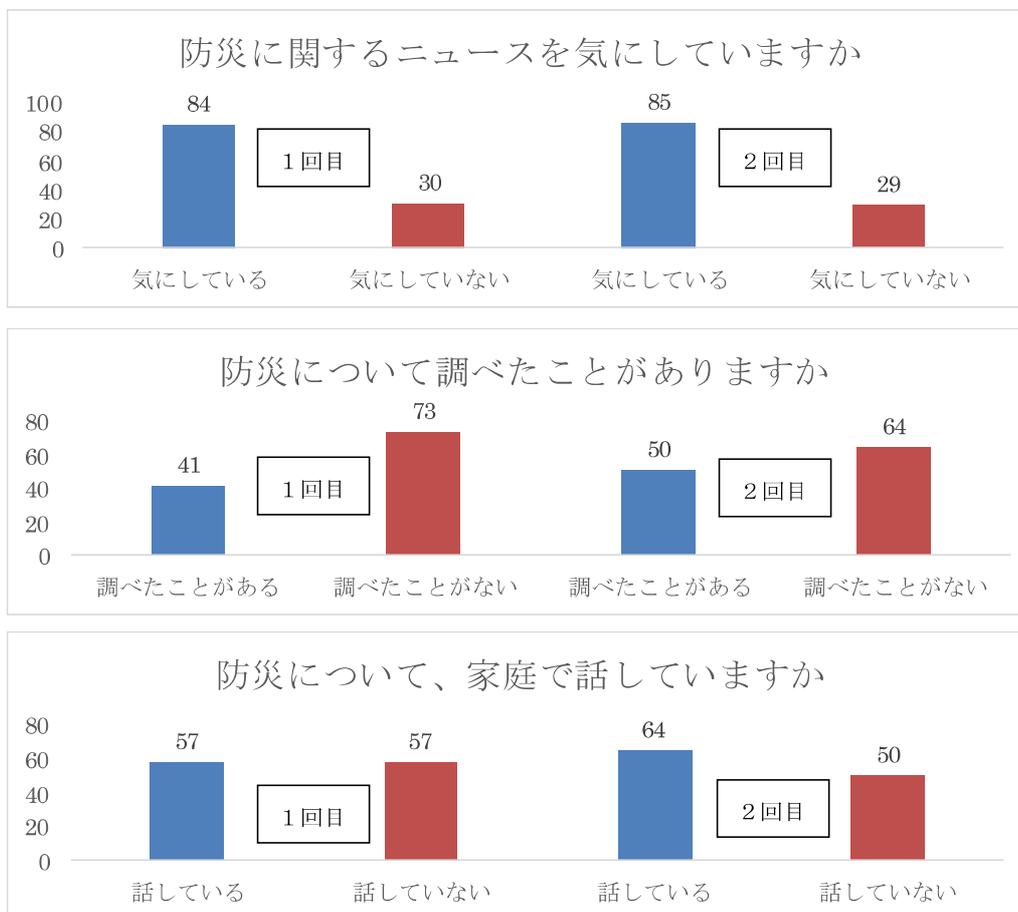
- ① 1年生は、地震が起きたときに、どういった行動を取ればいいのかを考え、「だんごむし」「さる」「あらいぐま」の3つのポーズをどの場面で使えばいいのかを考えて実践した。
- ② 2年生は、身の回りで地震が起こったとき、特に『教室』で地震が起きたときに、どのように避難をしたらよいかをテーマにし、地震が起きると、いろいろなものが『落ちてくる』、いろいろなものが『倒れてくる』、いろいろなものが『移動してくる』という、3点に視点を置き、児童に気付かせていく授業を展開した。
- ③ 3年生は、学校や地域には、火事に備えてどのような設備があるのか調べた。防火扉やシャッターなどが避難経路のどこにあるのかなどを調べ、避難をするときにより安全に逃げることができる方法を考えた。どこが安全で、どこが安全ではないかを考えたり、設備の大切さを考えたりすることで防災の意識を高めることができた。
- ④ 4年生は、通学路での危険箇所について調べた。自分が通ってくる通学路の中でどこが危険かを考え、大きな地震が起きたときにどのように対処すればいいのか考えた。
- ⑤ 5年生は、川の水による災害を、「浸食・運搬・堆積」のいずれのはたらきによるものか、関係づけながら考えさせた。また、川の水による災害を防ぐ取り組みについて資料調べをした。
- ⑥ 6年生は、A S U K Aモデルの紹介や、心肺蘇生法の実技のほか、「あっぱくん」を使用したAEDの体験などを、各クラス1時間ずつ行う。授業を通して、児童が心肺蘇生法・AEDの活用について理解を深めるとともに、命の大切さについて考えることができるようする。(3月実施)

(5) 防災意識調査アンケートの実施(2回目)

今年度の研究を通して、児童のどのように変容したかを見取るために、1回目と同じアンケートを2月に実施した。実施後、安全教育プロジェクトで集計をし、分析・考察を行った。

(6) アンケート結果の分析と検証

研究授業を行った2年生のアンケートの結果を基に、児童の変容について考察した。アンケート結果は以下の通りある。



アンケート結果から、児童の防災への意識が高まったといえる。家庭で災害時にどこに避難するかについて話し合ったり、地震の規模を表すマグニチュードについて調べたりしたなどの振り返りをしている児童もいた。

4 研究の成果と課題

昨年度に行った取組を基に、災害時に児童が主体的に行動できるように、教育計画を見直すことができた。小学校で自分の身を守る方法や校内外の危険箇所を把握するなどの基本的な内容を学習し、中学校では、災害の現状やそれに伴う危険について理解・予測し、自らの安全を確保するための行動と備えについて学習したり、地域の防災や災害時の助け合いの重要性を理解させ、避難所運営のシミュレーションを体験したりするなどの、より発展的な活動に繋げていけるように、小中学校の9年間を見通した指導計画を立てることができた。

今後は、小中合同引渡し訓練の実施や、引渡し訓練後の保護者対象のアンケート調査など、家庭への防災意識の向上を、小中で連携して進めていきたい。また、小学校6年間でどこまで身に付けさせるのか、教科や領域の年間指導計画への位置付けなど、細かいカリキュラムの作成が必要である。防災教育を基に、防災教育の視点を様々な教科へと広げていきたい。

研究主題

「ひたむきに運動に取り組む山田っ子の育成
～体育の楽しさを実感できる体育授業～」

川越市立山田小学校

研究のポイント

- 体育の教材の特性に対する教師の理解を基にした指導の工夫
- 仲間と協力して取り組む場を設定することによる協同学習
- 体育科授業を中心とした、授業規律の徹底

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本研究では、教職員の体育科への深い教材理解を基に、「体育の楽しさ」を実感できる児童を育成することをねらいとしている。「体育の楽しさ」については、先行研究として高田典衛氏の挙げている、「動く楽しさ」、「集う楽しさ」、「解る楽しさ」、「伸びる楽しさ」を基に考えた。これらを感じることができるよう授業を計画することで、体育好きな児童を増やすことができると考えている。

本研究における「ひたむきに」とは、運動に夢中で取り組む姿を想定している。夢中で取り組むことができるためには、単に体を動かしているだけでなく、教材の持っている特性を味わい、そのこつを探求しようとする姿も含意する。

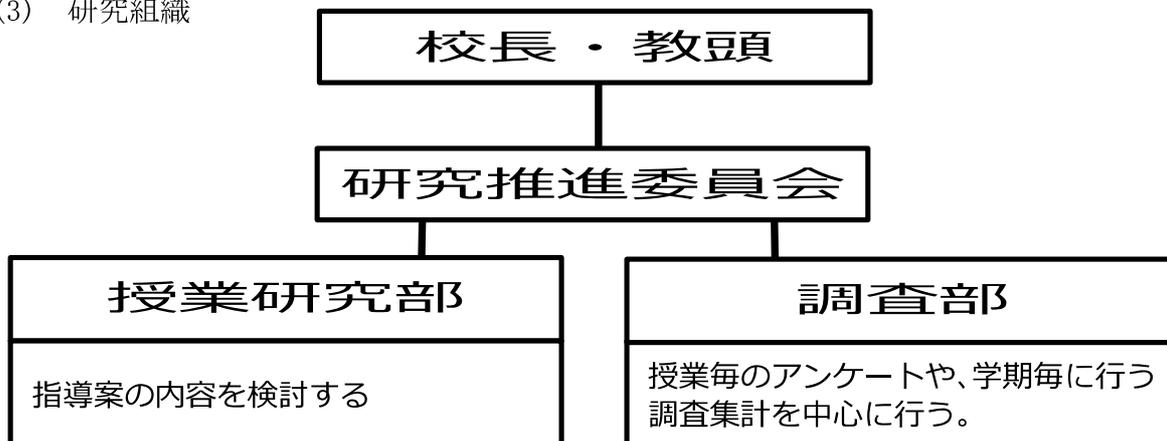
上記のような児童の姿を実現できることが本研究におけるねらいであり、それに対する手だてを各学年、ブロックで検討しているところである。

(2) 研究主題設定理由

本校児童は、平成31年度新体力テストの結果における総合評価「A+B+C」の値が73%にとどまり、埼玉県の前年値から10%程度下回る数値となっている。また、「令和元年度全国体力・運動能力運動習慣調査」の結果から、体育が好きだと答える児童の数値が全国平均で男子73%、女子、60%であるのに対して、本校はそれぞれ10%以上下回る数値であった。これは、児童の体育離れによって、運動に対する苦手意識が大きくなり、結果として体力の低下が招かれていることが想定された。

そこで本研究を通して、「体育好きな児童」を育成することで、体力の向上も望めるのではないかと考えている。また、教職員アンケートから、「体育科の研究を通して、心身ともにたくましい児童の育成を図りたい」という意見もあり生徒指導上の課題克服も念頭に、体育科の研究を進めることとした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(仮説1) 運動の特性や魅力を味わわせる授業を展開すれば、体育の楽しさを実感できるであろう。

(仮説2) 仲間と協力して取り組む場を設ければ、体育の楽しさを実感できるであろう。

以下実施した校内授業研究会である。

日時	内容	指導者
10/5	みんなで世界記録にチャレンジ!(走り幅跳び) 5年	前川越市教育委員会教育長 伊藤 明 様 川越市教育員会学校管理課指導主事 向角 知繁 様 川越市教育委員会教育指導課指導主事 田中 正徳 様
11/10	目指せ! 跳び箱名人(跳び箱を使った運動遊び) 2年	川越市教育委員会教育指導課指導主事 田中 正徳 様
11/13	ボールを打ち付けて相手に返そう!(プレルボールを基にした易しいゲーム) 3年	川越市教育委員会教育指導課指導主事 田中 正徳 様
12/8	器械運動(跳び箱) 4年	川越市教育委員会教育指導課指導主事 田中 正徳 様
12/10	わくわく生きものランドでへんしん!(表現リズム遊び) 1年	川越市教育委員会教育指導課指導主事 田中 正徳 様
記載のない学年については、緊急事態宣言に伴い中止		

3 実践事例

(1) 10月5日(月)実施 「走り幅跳び」

学年	単元名・教材名	時数
5年	みんなで世界記録にチャレンジ! (走り幅跳び)	6時間

学習内容	指導の実際・資料等
1 集合・整列・挨拶・健康観察 2 準備運動をする ・基本の運動 ・カエルの歌に合わせて前後左右にジャンプする 3 慣れの運動をする ・一歩助走で幅跳び、ねらい跳び 4 持っている力で実施する 5 本時のねらいを確認する ・助走、踏切、着地が身に付いているか確認しながら跳ぶ。 6 グループで挑戦する ・一人ずつ自分の課題克服に向けた跳び方を実践し、伝え合いの場を設けるようにする。 7 マイク・パウエル選手の記録にチームの合計で挑戦する 8 アドバースタイム 9 片付けをする 10 学習のまとめを行う 11 整理体操・健康観察・挨拶	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> <div style="width: 45%;">  </div> <div style="width: 50%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>掲示物を用意し、学習の流れ、これまで学習したことを解りやすくした。</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%; margin-top: 10px;"> <div style="width: 45%;">  </div> <div style="width: 50%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>世界記録よりも高い記録を出せるよう、チームで作戦を立て、一人一人の目標を決めた。</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%; margin-top: 10px;"> <div style="width: 45%;">  </div> <div style="width: 50%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>それぞれの課題が克服できているかどうか、見合ったことを伝える場を設けた。</p> </div> </div> </div>

(2) 12月10日(木)実施「表現運動遊び」

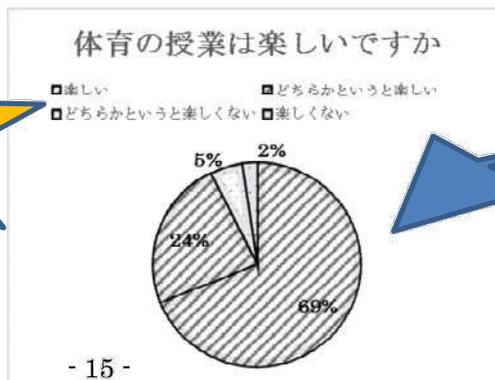
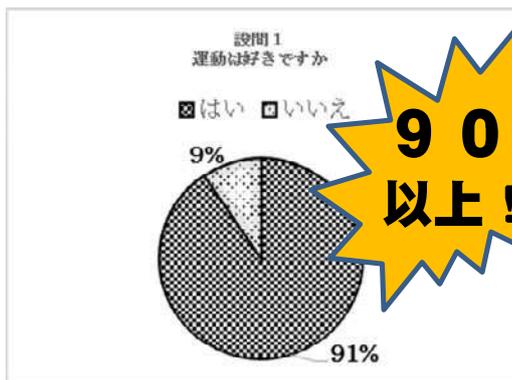
学年	単元名・教材名	時数
1年	わくわく生きものランドでへんしん! (表現リズム遊び)	5時間

学習内容	指導の実際・資料等
1 集合・挨拶・健康観察 2 準備運動・慣れの運動	「マカレナ」に合わせた創作ダンスで準備運動をして、心も体もほぐす。 
3 本時のねらいを確認する 4 表現遊び(主運動) ・「水族館へ行こうよ」をしながら、生きものの動きを確認する。 ・海の中を探検しながらイメージカルタをする。 ・兄弟グループに分かれてお互いに見せ合い、良いところを伝え合う。	生きものランドに行くという設定をして、BGMも流し、児童が没入しやすく工夫した。 
5 振り返り 6 集合・健康観察 7 挨拶	イメージカルタで行った動きを、兄弟チームで見合う。アドバンスカードを基に伝え合った。 

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ①仮説1「運動の特性や魅力を味わわせる授業展開すれば、体育の楽しさを実感できるであろう」
- ・「運動が好きですか」という質問に対して、「はい」と答えた児童が9月、12月ともに90%以上と高い水準を維持した。また、その理由として、運動すること自体が好きだと思っている児童が増えた。
 - ・児童の実態に合わせたルール設定をすることで、楽しく運動に取り組むことができる児童が増えた。
 - ・教師が運動の特性を理解したうえで指導計画を作ることで、技能の伸びを実感できる児童が増えた。
 - ・「体育の授業は好きですか」という質問に対して、楽しい、どちらかというとなんと楽しいと答える児童の割合が、9月から8%上昇し、93%になった。



②仮説2「仲間と協力して取り組む場を設ければ、体育の楽しさを実感できるであろう」

- ・質問4「体育(たいいく)の授業(じゅぎょう)で、楽(たの)しくないと感じ(かん)じるのはどんなときですか。」に対して、失敗すると恥ずかしいという理由を書いた児童が4%程減り、クラス内における協力関係の醸成が伺える。
- ・アンケート上は、体育で楽しいと感じる児童が増えて、「楽しさ」を挙げる児童が減っているが、体育カードや、ノートアドバイスや、動きから学習しようとする姿勢が育ってきた。

今日は、サッカーで友達にパスを
してつなげて、ゴールにボール
を入れることができませんでした。
でも、他の人や、いる時
「への方に向けて」と声をかける
ことはできました。
それから、次の時は、他の人
にうまくパスをつなげたり、ゴ
ールにいれたりしたいです。
また、水色のチームの人かパ
スをやるのがとてもうまいので、
それをよく見て私もうまくほ
りたいたいです。

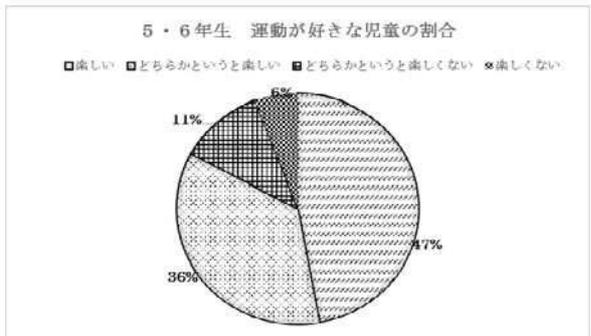
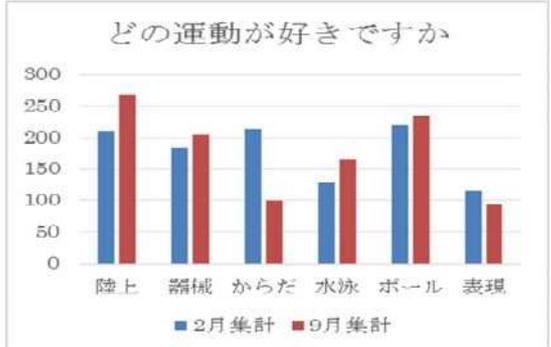
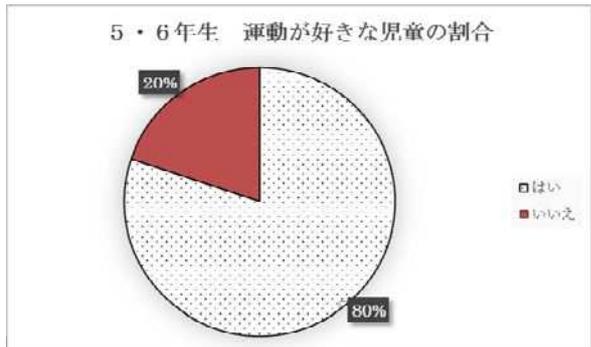
友達の
良い動きの発見

友達の良い動きの発見
をたくさんやる
ことを意識し
てやりました。
先生の授業は、
ていじんをしか
り表現でき
て、すばい
なと思いました。
先生の授業が
とてもうまい
ので、よく見
てやりました。

動きの良さ
友達との声の掛け合い

(2) 課題

- ・高学年児童の約20%が「運動が好きではない」と答えており、運動離れが進んでいるので、20分間休みなどの外遊びを奨励し、遊びの中から運動に興味を持てるようにしていく。また、体育の授業が「楽しくない」、「どちらかという楽しくない」と答えている児童も高学年に多いため、運動が苦手な児童へのアプローチについても研究の余地がある。
- ・好きな運動領域についてのアンケートの結果から、「からだづくり運動」や、「表現運動」など本年度重点的に実施した領域が伸びた一方、水泳や器械運動など、実施できなかった領域や、補助を必要とする領域では、伸びなかった。コロナ禍における補助のあり方、指導展開の工夫については来年度も検討が必要である。



研究主題

生徒同士の関わりを深める学級活動
～居心地のよい学級づくり～

川越市立川越第一中学校

研究のポイント

- 生徒同士の関わりを深める活動の研究をする。
- 他者と折り合いをつける力を育成する。
- 学級担任、学年職員、教科担当と連携を図り、よりよい学級集団の形成を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

これまで本校では、アクティブ・ラーニングでの学びの研究や、授業の磨き方、深い学びへのアプローチをテーマに研究を進めてきた。その中で、生徒同士の対話的な活動を増やす取り組みが行われてきてはいるが、授業以外での実際の生徒同士の関わり方には未だ課題が多く見られる。特に、上手く折り合いがつけられずに人間関係の修正ができないこと、集団の中で自己有用感を感じられずに不登校になってしまうことが多く見られるようになった。学校として、この課題に真正面から向き合い、教育活動を行っていく必要がある。

(2) 研究主題設定理由

他者とのよりよい関わり合いは生きていく上で必要不可欠であり、本校の生徒に身につけさせたいスキルの一つである。しかし、よりよい人間関係を促す活動を行う時間が確保できていないこと、小学校で培ってきた学級会の流れをくみ取れていないこと等、課題が多くある。教職員が教育手法を研究し、生徒同士が関わり合える活動を充実させることでよりよい集団を形成していきたい。

(3) 研究組織

校長—教頭—教務主任・研究主任・特別活動主任・教育相談主任
各学年研究担当・特別活動部会・教育相談部会
上記を除く全教職員

2 研究の内容

学校教育目標 自主 練磨 敬愛

目指す生徒像 自律できる生徒 努力し続ける生徒 仲間と協働する生徒

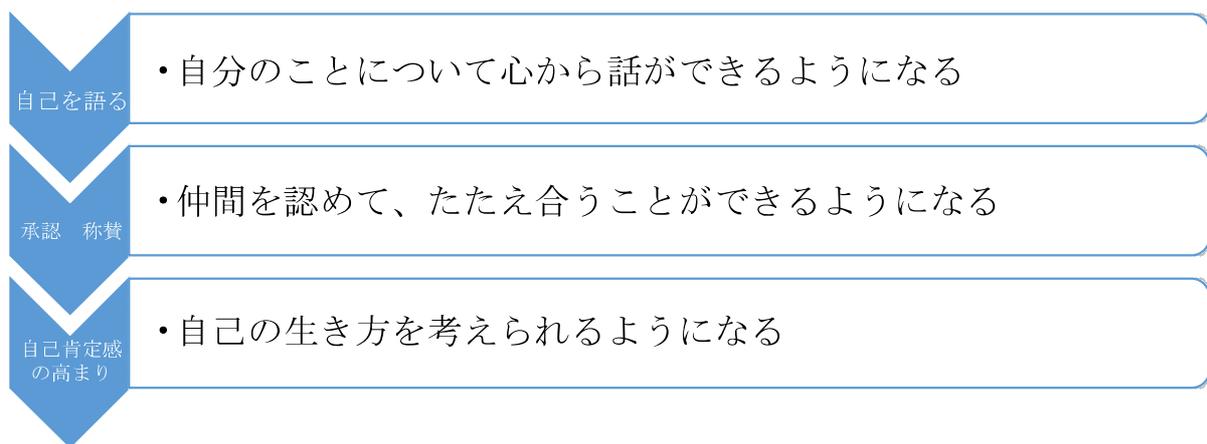
(1) 研究主題「生徒同士の関わりを深める学級活動～居心地のよい学級づくり～」

(2) 目指す生徒像

「自分と本気で向き合い、自己の生き方を考えられる生徒」

目指す生徒像の具現化	◎一人一人が自分の意見をもつ	◎一人一人が相手の意見を真剣に聴く	◎一人一人が自信をもって、自分の意見を発表する
望ましい生徒の行動とプロセス	〔各教科〕 各単元の振り返りの場面で自分の意見をもつ。 〔学級や学年〕 集団の課題を自分のこととして捉え、自分がどのような力を発揮していくかを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・相手が話しやすい環境をつくる（相づちや質問など） ・相手がどのような意見をもっているのかを判断する。 ・自分の意見と違う場合は、相手の意見に補足し、双方のよさを見つけて生かしていく。（折り合いの付け方） 	<ul style="list-style-type: none"> ・支持的風土が出来上がる。 ・自分に自信がつく。 ・発表をすることができる。 ・ただ発信するだけでなく、他者の意見を受け入れて、考えを深める。

以上のことから、本校の研究のモデルを設定した。



3 実践事例

(1) 國學院大學 杉田洋教授による講演会「特別活動に取り組むにあたって」

(令和2年6月23日)

本研究の進め方や生徒へのアプローチ方法等、研究の道筋を明らかにするために実施した。これにより、「2 研究の内容」で掲げた、目指す生徒像や研究モデルを確立させた。

(2) 教師同士の授業見学の推進（令和2年10月20日～30日）

本校では教師同士での授業見学があまりできていない現状がある。授業、朝の会や帰りの会、委員会活動、部活動において、各教師が工夫していることを事前にアンケートをとり集計した。アンケートの内容と結果（抜粋）は以下の通りである。

その後、授業見学の強化期間を設定し、お互いの取組を見合うことで、指導法の幅を広げることをねらいとした。

アンケート内容	アンケート結果（抜粋）
① 生徒に意見を持たせる工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・「考える」時間を確保し、じっくりと自分と向き合わせる。 ・自分の意見をまず書かせ、形にすることで思考を明確化させる。
② 相手の意見を聴かせる工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・短学活時に顔を上げさせる。 ・話し合い活動をする事への意義を持たせる。(明確に説明をする。) ・発表者への感想や意見を投げかける取り組みを行っている。
③ 自信をもって意見を発表させる工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・発表に苦手意識のある生徒には、事前に解答を確認し、成功体験を積ませる。 ・授業の始めには易しい発問から行う。 ・ペアやグループで確認する時間を確保してから発表させる。

(3) 学級会の実施（令和2年8月、10月下旬）

本校の生徒は、川越第一小学校、仙波小学校、中央小学校の3校から入学している。小学校では定期的に学級会が行われ、児童主体の活動が活発に行われている。しかし、本校では学級会の時間の確保ができていない現状がある。学級会は、生徒が能動的に課題解決をするための機会となり、生徒同士の関わりを深めるチャンスとなる。今年度は、8月下旬に行われた生徒総会の議案書を全学級で読み合わせ、「よりよい学校にするために」意見を交わした。その際には、事前に特別活動部会で学級活動委員の運営の仕方や共通のワークシートの活用、話し合いの進め方等を確認した。また、1、2学年は10月29日に「合唱祭の振り返り」を学級で話し合う取組を行っている。



学級会の様子

(4) 人権感覚育成プログラムの実施（令和2年12月初旬）

校内研修にて、12月4日～10日の人権週間に向けて、人権に関するアンケートの結果を分析した。本校の生徒は、「コミュニケーション能力（技能的側面）」、「自己尊重の感情」の項目で、他の項目と比べて数値が低い傾向があった。そこで、学年の実態に合わせて、人権感覚育成プログラムを実施した。1学年では自己受容の観点で、2学年では人間の価値の尊重の観点で、3学年ではアサーション・トレーニングを実施した。



プログラム実施の様子

(5) 市教委・西部教育事務所学校指導訪問（令和3年1月14日）

全学級において公開授業を行った。その際、研究モデルに基づいた授業展開を指導案に組み込み、授業後に指導講評をいただいた。各学年1クラスずつ行った学級会では、学習法の改善、学級の課題解決、卒業に向けた取組等を話し合った。



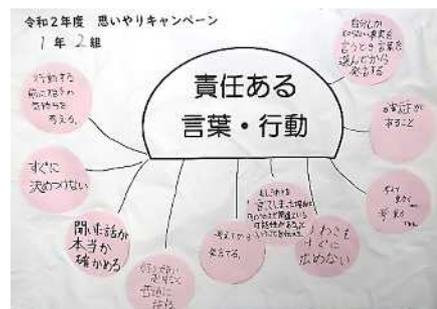
学級会の様子

4 研究の成果と課題

(1) 教科指導の重要性の再確認

6月23日に実施した、國學院大學杉田教授からの講演会やその後のご指導の中で、生徒同士の関わりを深めるためには、担任任せの学級指導だけではなく、教科指導の中においても生徒が語り、能動的に課題を解決していく力を身につけさせるべきだご指導をいただいた。これにより、研究を教科指導にまで広げ、毎日の授業において生徒が活発に授業に参加できるよう手立てを考えることができた。しかし、授業の見学については教師により回数や時間に差が出てしまったので、全教職員がより授業見学ができるよう、策を練っていききたい。

さらに、平成30年度・令和元年度に研究を行っていた調布市立調布中学校に足を運び、ショートディスカッションや思考ツールの活用実践も見学することができた。本校の実態に沿った形で、授業改善に役立てていきたい。



思考ツール「クラゲチャート」

(2) 学級会の基盤作り

学校として学級会を行う日程を定めたことで、学級会当日の時間の確保をすることができた。また、黒板に使用するマグネットを全学級揃えたことで、次年度への引き継ぎが円滑に行えることとなった。学級活動委員となった多くの生徒たちは、小学校での知識や経験をもとに、集団の合意形成を目指して前向きに取り組んでいた。次年度は、学級会の進め方や黒板の使い方を小学校の指導法により近い形で取り組みつつ、成長段階に合わせた学級会の在り方を再考していく。

(3) SSTやアサーション・トレーニングの計画的な実施

次年度も、今年度同様にあらゆる活動に制限がある中で、生徒同士の関わりを深める本研究を継続していく。物理的距離をとらなければならない状況下においても、心と心が繋がっている実感を持てるような教育活動を、全教職員で考えていかなければならない。授業での指導に加えて、特別活動部と教育相談部が連携を図り、先を見通した計画を立てていきたい。また、その中で、生徒の様子を観察し、その変容を見取る必要がある。

「主体的に行動できる生徒の育成を目指す安全教育の推進」

～「生きる力」を育む防災教育の充実～

学校名 川越市立霞ヶ関西中学校

研究のポイント

- 生徒が自ら考えて判断し行動する場を設定する。
- 小中連携を通して、学年ごとにテーマを決めた防災学習に取り組む。
- 外部の専門家の指導の下、研究を推進する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

子供たちが充実した生活や学習に取り組めるようにするために安心・安全な環境を整えることが学校の責務である。これまで本校では、学校安全計画を作成し計画的に安全教育並びに安全管理を推進してきたが、生徒の安全を脅かす事故が毎年数件発生している。

このような中、昨年度、本校は令和元年度文部科学省委託事業「学校安全総合支援事業」を受けた埼玉県教育委員会・川越市教育委員会の委嘱を受け、防災教育を中心とした安全教育の指導法の研究に取り組んだ。この研究により、生徒達が災害を自分事として捉えられるようになったのは大きな成果であった。この生徒の意識の変容をさらに進化させることが本校の安全教育の充実に資することになると考え、継続して研究に取り組むこととした。

昨年度の取組を継承、発展させ、防災に関する意識調査の実施、避難訓練の改善、学年ごとのテーマ学習などを計画的に行うことで充実した安全教育の実現を図る。そして、それらの活動を通して、安全確保のために主体的に行動することができる生徒を育成することが本研究のねらいである。

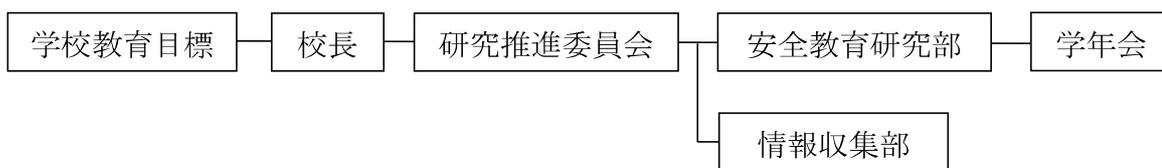
(2) 研究主題設定理由

「「生きる力」を育む防災教育の展開」（H25.3 文部科学省）には、「中学校段階における防災教育の目標」として「日常の備えや的確な判断のもと主体的に行動するとともに、地域の防災活動や災害時の助け合いの大切さを理解し、すすんで活動できる生徒」を育成することが示されている。

しかし、本校生徒の実態は、7月に緊急地震速報が発令された直後に行ったアンケート調査の結果を見ると、「教員が近くにいない時に自分たちで考えて行動できるか心配だった」、「自分一人だったらと考えると怖くなった」、「突然のことで焦ってしまい、すぐに身を守ることができなかった」などの感想があり、自分で判断して行動することに課題があることが分かった。

大きな災害への備えや災害が発生した際の対応について、本校生徒は自ら判断して行動に移すことに課題があり、いざ大災害が起きた時の安全確保に大きな不安があるので、本研究主題を設定して研究を進めることとした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

- (1) 防災意識調査アンケートの実施（1回目）
- (2) アンケート結果の分析
- (3) 防災学習ガイダンスの実施
- (4) 避難訓練の改善
- (5) AEDを使った救命講習
- (6) 学年ごとのテーマ学習の実施
 - 1年生 防災ポーチ作り、備蓄倉庫見学
 - 2年生 HUG（避難所運営ゲーム）
AED訓練
 - 3年生 防災小説
- (7) 防災意識調査アンケートの実施（2回目）
- (8) アンケート結果の分析と検証

防災学習アンケート 川越市立関ヶ原西中学校

学年・名前：
 _____ 年 組 _____ 番 名前：_____

あなたがひとりだけで登下校しているときに地震が起きたら、以下のことができますか。

① 落ち着いて身を守る	できる	たぶんどできる	たぶんどできない	できない
② 学校に行くか家に帰るか避難場所へ行くかを自分で決めて、行ける	できる	たぶんどできる	たぶんどできない	できない
③ 安全な道を選べる	できる	たぶんどできる	たぶんどできない	できない
④ 避難した場所にとどまる	できる	たぶんどできる	たぶんどできない	できない

あなたは、首都直下地震が起きた時、自分の家のまわりでどんなことが起こるか知っていますか。

知っている 知らない

あなたの家は、災害に備えて何か準備をしていますか。

① 水や食料を保存している	している	していない	わからない
② 非常用持出し袋を用意している	している	していない	わからない
③ 重い家具を固定している	している	していない	わからない
④ 家具の置き方を注意している	している	していない	わからない
⑤ ガラスにフィルムを貼っている	している	していない	わからない
⑥ 家が地震に耐えられるか確認した	している	していない	わからない
⑦ 家族で防災会議を開いた	している	していない	わからない
⑧ 家族で災害時の約束事をしている	している	していない	わからない

⑨ その他（もしあれば）： _____

3 実践事例

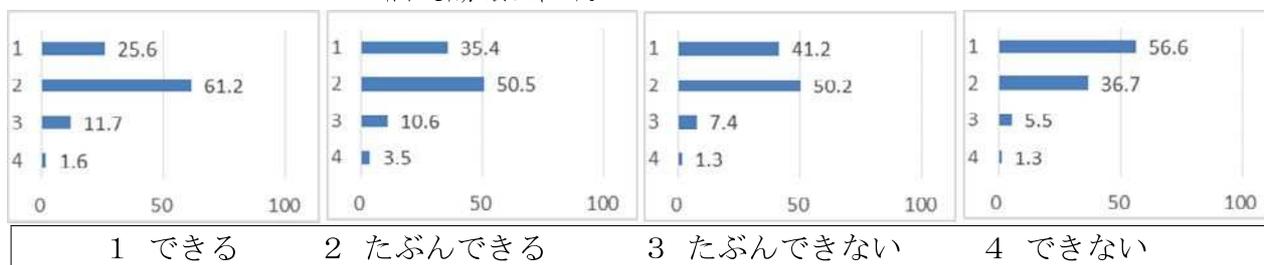
- (1) 防災意識調査アンケートの実施（1回目）
 - ① アンケートについて

生徒の防災に対する意識を調査するため、地震学者の慶応義塾大学 准教授 大木聖子氏（以下、大木准教授と表記）の協力を得てアンケートを行った。主な項目は、「自分ひとりで登下校をしている時に地震が起こった場合の行動について」、「自分が暮らしている地域に起こる災害について」、「家庭内での災害に対する準備について」とし、情報収集部で分析を行い、全体で共有することで現状の課題を把握した。

② 結果

ア 一人で登下校しているときに地震が起きたら、以下のことができますか。

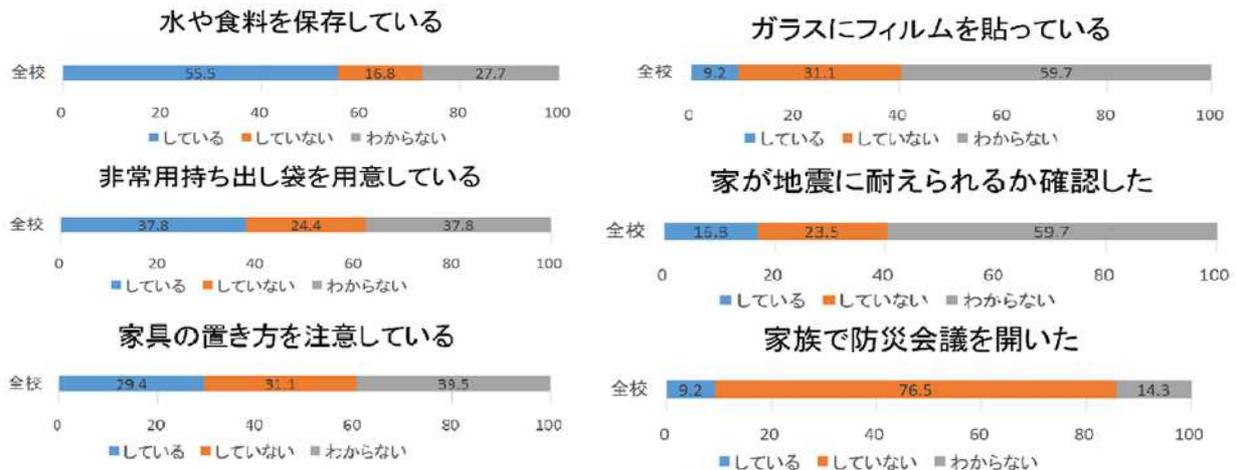
落ち着いて身を守る 学校に行くか家に帰るか避難場所へ行くかを自分で決めて、いける 安全な道を選べる 避難した場所にとどまる



イ 首都直下型地震が起きたとき、自分の家の周りで何が起こるか知っていますか

「知っている」 23.3% 「知らない」 76.7%

ウ あなたの家は、災害に備えて何か準備をしていますか



③ 分析

- ア 通学路など、自分がよく知っている場所での災害であれば、自分の身を守るために、自分で判断し行動することができる。
 - イ 災害が起こった際に、どのような状況になってしまうか具体的にイメージすることができない。
 - ウ 災害に対する必要な準備の知識が乏しく、家庭での防災意識も低い。
- これらの分析結果から具体的に取り組む学習テーマを設定し、指導計画を作ることができた。

(2) 避難訓練の工夫改善

従来の避難訓練のあり方を見直し、より良い避難訓練を実施するために以下の2つの取組を行った。

① 避難訓練実施レポートの活用

大木准教授から提案があった「避難訓練実施レポート」を活用して避難訓練の計画と振り返りを行った。避難訓練ごとに教員がレポートを作成し、安全教育部会で検討することで、次の避難訓練の改善に役立てることができた。

② 様々な仮想トラブル下での避難訓練の実施

状況に応じた判断力を育成するために、避難経路である昇降口のドアを、数枚だけ開かないように制限した避難訓練を実施した。先頭の生徒はドアが開かずに戸惑っていたが、開くドアを探して、見つけることができた後は落ち着いて避難をすることができた。

避難訓練実施レポート

学年名	記入者名	記入日
訓練で想定する状況		
実施予定日時	年 月 日 () 時 分 ~ 時 分	
想定場所	授業中・休憩中・給食中・帰校中・放課後・雑用中・登校中・下校中・その他 ()	
想定場所	普通教室、特別教室 ()、保健室、体育館、図書室、校舎先 ()	
想定状況	地震・火災・行方不明者発生・けが人発生・管理用不在・在校人数不明・移動先・その他 ()	
教員者の動き		
訓練実施後の記入欄		
実施日時	年 月 日 () 時 分 ~ 時 分	
訓練の実態		
想定していたこととの相違点		
ほしい変更	どのような変更があれば改善できると思うか	



昇降口の様子の写真

(3) 引渡訓練の実施

本校は、昨年度まで大地震が発生した場合は市のマニュアルに則って生徒を学校に留め置き、通学路の安全確認後に教員の引率により集団下校をしていた。

しかし、昨年度1年間の研究の結果、この方法では様々な課題があることが判明したので、今年度から保護者への引き渡しに変更することとした。そのために、本校にとっては初めての引渡訓練を実施した。

(4) AEDを使った救命講習

埼玉医科大学から講師を招いて、生徒向けにAEDの使い方や心肺蘇生法について講義を行った。正しい知識と勇気を持つことの大切さや命の大切さについて考えを深め、学習に取り組むことが出来た。



(5) 3年間を見通した発達段階に応じた学年ごとのテーマ学習

1年生 : 防災ポーチ作り、備蓄倉庫見学

2年生 : HUG（避難所運営ゲーム）、AED訓練

3年生 : 防災小説

- ① 1年生は「自助」の能力を高めるために、災害の現状やそれに伴う危険について理解・予測し、自らの安全を確保するための行動と備えについて学習をする。
- ② 2年生は「共助」の能力を高めるために、地域の防災や災害時の助け合いの重要性を理解させ、避難所運営のシミュレーションを体験する。
- ③ 3年生は「防災学習のまとめ」として、災害が発生した場合に「自助」としてどのように行動するか、そして「共助」として助け合うために何をすべきかを小説に書く学習を通して災害を自分事として捉えさせる。

防災小説の取組は、本年度で2年目となった。自分の被災を文章で表現し、あらかじめバーチャルで経験することで、実際に災害が起こった場合に、より冷静に考えることができるようになる。小説の最後を、ハッピーエンドで完結させることで「こうしておいたから助かった」ということを考えることができ、主体的に行動することの大切さを実感することが出来る取組であった。

(6) 校内研修の充実

1年生で行う「防災ポーチ作り」と3年生で行う「防災小説」の学習は昨年度から取り組んでいるが、2年生で行う「HUG（避難所運営ゲーム）」の学習は本校で初めて扱う防災教育である。そこで、生徒に指導する前にまずは指導する側の教員がHUGの内容とその指導法について熟知しておく必要があるために、校内研修で教員自身が取り組んだ。大木准教授を招聘しての2回に渡る研修により、HUGの内容と指導法、さらには実際に避難所が開設された際に起こりうる様々なトラブルの内容とそれに対する対応の難しさを実感することができ、教員自身が防災教育の重要性について改めて認識することができた。

4 研究の成果と課題

昨年度からの取組を整理し、小学校と連携をした指導計画を立てることができた。自分の身を守る3つのポーズや校内危険箇所の把握などの基本的な内容を小学校で指導することで、中学校でスムーズに避難訓練を実施するだけでなく、より発展的な活動に取り組むことができた。

また、避難訓練後に教員向けの振り返りアンケートを行い、安全教育部会で分析、全体で共有することで現行の避難訓練の課題点を発見し、さらには様々なトラブル発生を想定しての訓練を実施し、教員自身の防災教育に対する意識も大きく変化した。

今後は、災害に対して主体的に行動できるようにし、自助だけではなく共助の支えの一翼を担える生徒の育成を家庭や地域と連携を図りながら行うことが課題である。

研究主題

「課題解決的な学習（川越スタンダード）を取り入れた授業改善」

川越市立山田小学校

研究のポイント

授業公開を中心に、授業研究会を実施し、算数科の授業について協議を行う。このことにより、教師の指導力と児童の学校の学びの質を高めていくとともに、児童一人一人の学力向上を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

令和2年4月に川越市教育委員会から、「川越市小・中学生学力向上プラン」が示され、学びの本質に立つ授業スタンダードの具現化が求められている。

本校では、令和元年度全国学力・学習状況調査及び県学力・学習状況調査の結果を踏まえた市町村立学校への重点的な支援校として、埼玉県教育委員会、川越市教育委員会より支援をいただき、主に算数科を中心に研修を進めてきた。

本研究では、課題解決的な学習（川越スタンダード）を取り入れた授業改善の研修・研究を通して、学力向上はもとより、児童一人一人が志を高くもち、自ら学び・考え・行動する子どもを育成し、児童の学ぶ意欲と自己肯定感を高められるようにしたい。

(2) 研究主題設定理由

本校の最重要課題である学力の向上を目指して、授業改善を行ってきた。

しかし、授業改善や学級づくりには、教師の個人差があり、児童の

学力の差となっている。そこで、授業指導方法の改善に特化して校内研究に取り組むことを目的とし、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織

研究推進委員会（校長・教頭・研究推進委員長・研究主任）

｜

全職員

2 研究の内容及び実践経過

(1) 川越市小・中学生学力向上プランについての校内研修

（令和2年9月18日）

川越市教育委員会教育指導課副主幹佐々木寿志先生に、川越市小・中学生学力向上プランについて、特にまとめと振り返りの仕方について具体的な場面を提示され、ご指導をいただいた。

(2) 市教委による授業指導（令和2年9・10月）

川越市教育委員会教育指導課副主幹佐々木寿志先生による授業参観及び研究協議を担当全員に行っていただいた。研究協議では、放課後の時間を使い、一人一人にご指導をいただいた。

(3) 校内授業研究会（令和2年11月16日）

・授業 6年1組

算数科 「比例と反比例」

・指導者 川越市教育委員会教育指導課副主幹 佐々木 寿志 様

川越市教育委員会教育指導課指導主事 田中 正徳 様

・参加者 本校職員と小中連携として、川越市立山田中学校教頭及び教諭1名

・授業の様子



・研究協議の様子



3 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・授業を実施する前に、「授業デザインシート」を活用した。シートを活用することにより、授業のねらいが明確になり、まとめや振り返りの

仕方について、整理や確認ができた。

- ・ 1 単位時間の中で、川越市小・中学生学力向上プラン（川越スタンダード）が定着し、「めあて・見通し」「学び合い」「まとめ・振り返り」が学びの好循環につながっていた。
- ・ 授業の振り返りを通して、児童一人一人の学びが深まった。

R2年度 授業デザインシート	
*本時で目指す児童生徒の姿（ゴール）から逆算して授業をデザインしてみよう	
①	本時のねらい（児童生徒に身に付けさせたい力）
②	ねらいに向けての導入の工夫（必要感、期待、疑問、興味、関心等） 問題、学習課題、学習のめあて
③	学習活動
④	まとめ
⑤	適用問題
⑥	予想される振り返り
教師の支援・指導（○留意事項）	
ねらいを達成した児童生徒の姿（評価規準）	



(2) 課題

- ・ 全職員が、学びの本質についてより研修を深め、川越スタンダードを具現化した授業を実践していきたい。
- ・ 全国学力・学習状況調査や県学力・学習状況調査による児童の実態をとらえ、授業改善に生かしていきたい。
- ・ 今年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、授業形態等の制限や消毒作業による校内研修回数や時間の制限があり、思ったように進められなかった。
- ・ 市内の先生方や保護者に授業を公開し、今年度の授業成果を見ていただきたかったが、できなかった。次年度は、授業改善の様子を保護者に参観していただきたい。

研究課題

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」

川越市立大東中学校

研究のポイント

- ・川越市学力向上プランを踏まえた、生徒の思考力・判断力・表現力の育成のための授業改善
- ・グループ活動や話し合い活動を多く取り入れた授業展開
- ・まとめ、振り返りの実施を踏まえた授業スタンダードの確立

1 研究の概要

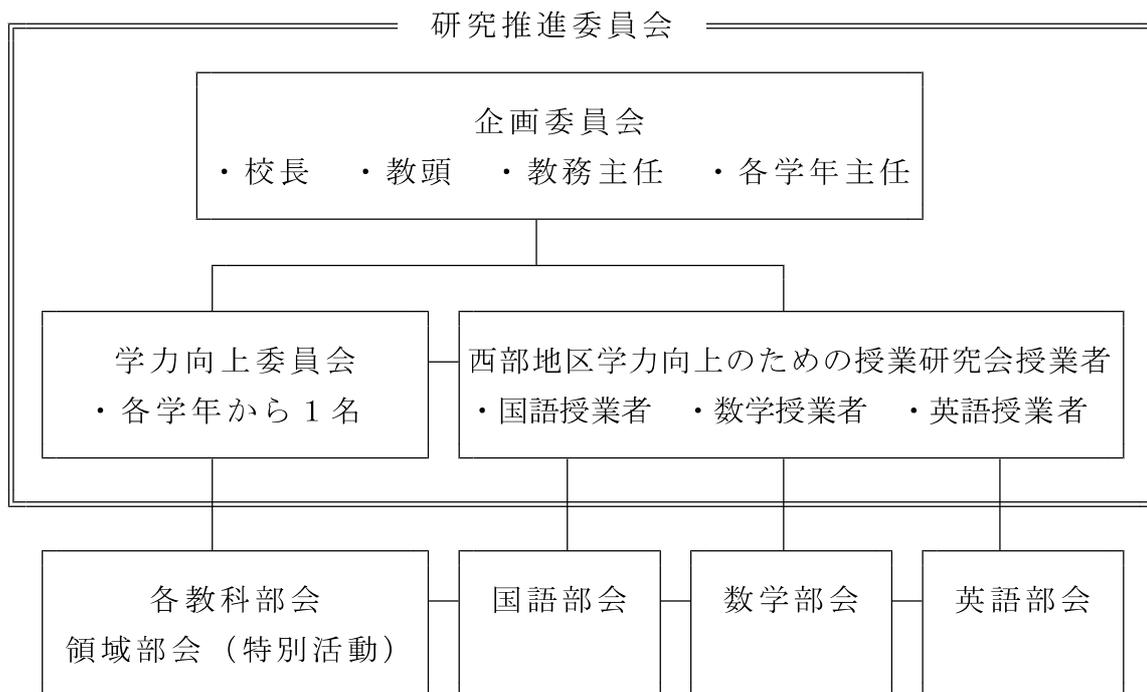
(1) 研究のねらい

授業実践を通じた成果と課題をもとに、授業研究会を実施し、各教科等の特質に応じた学習活動を改善する視点について協議を行う。これにより、学校の学びの質を高めていくとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて実践的な授業改善に取り組んでいくことで学力向上を図る。

(2) 研究主題設定理由

本校の学校テーマである「学び合い 鍛え合い 認め合い」から深い学びに向けた学習活動の展開を図りたいと考えた。

(3) 研究組織（新たに研究推進委員会を組織）



2 研究の内容

5月18日	研究推進委員会（研究計画）
6月4日	校内全体研修会（研修計画、共通理解）
6月25日	研究推進委員会（活動計画）
7月2日	校内全体研修会（取組内容の協議）
7月～9月	研究の実践・指導案検討（各教科部会）
9月10日	校内全体研修会「学力向上プランにもとづく授業改善」 指導者：川越市教育委員会教育指導課 墨谷悦史 指導主事
10月14日	西部地区学力向上のための授業研究会打合せ
11月8日	成果発表資料（指導案綴）作成
11月10日	成果発表Ⅰ 授業公開 （川越市教育委員会・西部教育事務所学校指導訪問）
11月11日	成果発表Ⅱ 授業公開・研究協議 （西部地区学力向上のための授業研究会）
12月	研究推進委員会（実践のまとめ）

3 実践事例 実際の指導案より抜粋

<国語>

研究の視点

(1) 主体的・対話的で深い学びを実現 する授業づくりについて

単元で身に付けさせたい力を明確にし、そのために必要な言語活動を設定している。その際に、学習活動に必要感をもたせることで主体的に取り組めるようにしている。また、生徒が見通しをもって学習活動に取り組めるよう、学習のゴールはどこか、どんな目的や意図があ

るかを、単元計画を立てるときに共通理解できるようにしている。

学び合いの場面でも、目的意識や必要感をもたせ、話し合いや教え合いをおこなっている。また、答えだけでなく、「なぜそうなるか」という根拠の部分大切にすることで深い学びにつながるようにしている。



(2) 「まとめ」「振り返り」の充実について 公開授業（国語）

「まとめ」は「課題」に対して板書のキーワードを使いながら、教師が学んだことの整理や確認をし生徒と共に行っている。1時間の思考の流れを板書に残すことでまとめスムーズにできるようにしている。

「振り返り」では振り返りカードを使用している。理解の状況の自己判断、取組の姿勢・態度の自己判断、学びの過程の自己判断、理解の捉え直し、満足感や充実感等の味わい直し、次の学びへの期待・思いや願いといった観点から自由記述を行うことで、本時の学びを自分の学びとして深め、次の学びへとつながるようにしている。

<数学>

研究の視点

(1) 主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりについて

教師と生徒の対話の中で、答えだけではなく「なぜ、そうなるか」という理由の部分大切にしながら

授業づくりを心がけている。また、生徒同士の対話では、周りの人たちとの話し合いや教え合いを取り入れながら、生徒の深い学びに繋げている。



(2) 「まとめ」「振り返り」の充実について 公開授業（数学）

「まとめ」と「振り返り」はノートに書かせて、数名に発表させるようにしている。「課題」を「まとめ」と正対するように設定し、「まとめ」は授業で学んだことを授業の中で出てきたキーワード等を使って書くことができるようにしている。「振り返り」は落ち着いた雰囲気の中で書かせ、定期的にノート点検を行い「振り返り」から生徒の理解の状況や取り組む姿勢・態度等を読み取り、自分自身の指導に活かしている。

<英語>

研究の視点

(1) 主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりについて

毎回の授業の主に導入場面において、Today's Goalの板書カードを使用して本時の目標を提示している。授業で配布するプリントには、生徒がめあてを達成するため、段階的に学習活動が記されている。生徒が学習のめあてや、それを達成するための見通しをもって意欲的に授業に参加できるようにするためである。



公開授業（英語）

また、Student Teacher制を基本としたペア活動やグループ活動を多く取り入れ、生徒同士で協働して課題解決を行えるようにしている。自身の考えや学びを協働する中で深められるようにしている。

(2) 「まとめ」「振り返り」の充実について

新出文法事項を導入した際は、板書内容をもとに、教師と生徒で学習内容を確認する機会を設けている。教科書本文の内容理解を目的としている授業の場合には、学習内容についての理解度を図るための質問を教師が生徒に対して行い、まとめとしている。

振り返りについては、本校英語科共通の振り返りカードを使用している。振り返りカードの記入項目は、日付、積極性（4段階評価）、本時の目標・課題、自己評価である。自己評価の欄には、授業のまとめの内容を踏まえて、今までに学習したこととの関連、今日の授業でできるようになったことや気づいたこと、これからの学習への見通しを入れて書くように指導している。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・川越市の授業スタンダードを理解し、振り返りを大切にする授業の計画と実践ができた。

(2) 課題

- ・コロナ禍での有効な対話的学びの実施
- ・深い学びにつながる振り返りの工夫



研究協議

川越市立教育センター

令和3年3月発行

〒350-0001

埼玉県川越市大字古谷上6083-10

TEL (049) 235-7591

FAX (049) 230-1023



川越市マスコットキャラクター
ときも